

アウグスティヌスにおけるリベラル・アーツ観

山 川 明 子*

St. Augustine's View of Liberal Arts

YAMAKAWA Akiko

abstract

St. Augustine says in his early work "De Ordine" that liberal arts serve as the ladder of philosophical dialectic. By philosophical dialectic, man can enter the order of universe.

This view of St. Augustine can be traced back to Plato. In "Republic", Book 6~7, Plato explains how to educate a man to be a philosopher by simile of Line and Cave. According to the simile, philosophical dialectic is the final step of education, and liberal arts are preparatory training for philosophy, because they are systematic and have logical coherence like the world of ideas, reached only by philosophical dialectic. The world of idea's system isn't based on the visible world, so it is almost impossible to learn philosophical dialectic without having learned liberal arts.

Liberal arts help to appreciate the order of the universe and to reach the ultimate wisdom. St. Augustine doesn't state definitely in his work, but we can read and understand his view of liberal arts by comparing with Plato.

Key words : liberal arts, philosophical dialectic, order

1. はじめに

ヒッポのアウグスティヌス (Augustinus, 354-430) の初期の著作『秩序論 (De Ordine)』(以下『秩序』)¹⁾のテーマは、神の摂理と悪の問題である。宇宙全体の秩序は神に由来するのに、なぜ悪が存在するのだろうか。この問題についての結論は出せないまま、後半すなわち第二巻において、学問の秩序が語られることになる。この『秩序』中にはリベラル・アーツ (自由学科、artes liberales) についての記述が随所に散りばめられている。彼自身、『再考録』第一巻三章に「リベラル・アーツに重きをおきすぎた」と記していることからわかるように、リベラル・アーツは決してこの書物の主題ではない。それでも彼は、一時期修辞学の教師を務めていたこともあり、リベラル・アーツに対する関心は深かった。『告白』にもリベラル・アーツへの関心・敬意が語られているところが数箇所ある²⁾。だが残念なことに、リベラル・アーツ全体についてのまとまった著作は残されていない。

この「リベラル・アーツ」の語を最初に用いたのはキケロであるといわれている³⁾。アウグスティヌスがキケロに傾倒していたことは知られているが、『秩序』にも『弁論家について (De Oratore)』の影響があると指摘されている⁴⁾。『弁論家について』に「自由人にふさわしい学術」(1巻-72)とあるように、リベラル・アーツは何か専門的技術のためのものというよりは、自由な市民として生きるに必要な教養を与える学問であると考えてよい。

キーワード：リベラル・アーツ、哲学的問答法、秩序

*平成6年度生 比較文化学

本稿では、『秩序』中の断片的な記述から、アウグスティヌスのリベラル・アーツ観を読み解くことを目的とする。『秩序』では、リベラル・アーツは主題ではないため、それが秩序理解のためにどのような役割を果たすのか、詳細に論じられていない。ところが時代を遠く遡り、プラトンの『国家』第六巻の「線分の比喩」、第七巻の「洞窟の比喩」の中に、その解答を見出すことが可能なのである。

2. 『秩序論』におけるリベラル・アーツ

『秩序』は、「この世界が、それによって包括され統御されている宇宙全体の秩序を知ったり、明らかにしたりすることは、人間にとってきわめて困難であり、まれなことである」と、宇宙全体の秩序を知ることの困難によって語り始められる。この後、秩序を知るためには全体を見ることが重要であると、モザイクの例をもって説かれる。

もしだれかある人が、わずかの範囲しか目をやらないために、モザイク状の床においてわずかな一コマの敷石以上にはその視野が及びえないとしますと、その人は、このモザイクの作者を、秩序と構成とを知らないものとして非難するでしょう。しかしそれは、そのモザイク状の作品が一つの美しい構図に合致したのものとして、(全体と部分とが) 同時に見られて把握されないので、小石が無秩序にさまざまにはめこまれたものとするためなのです。(『秩序』1-2)

全体を見ることができなければ、秩序を知ることはできない、という当然のことが、モザイクの比喩によって効果的に語られている。何事もそれだけを見て判断するのではなく、全体の秩序を見渡すことができた上で、その中における意味を見出さなければならない。このことを確認した後、最初に「リベラル・アーツ」の語が現れる。

自らを知るためには、人間は感覚から退き、心それ自体へと集中し、自分自身に立ち返るという大いなる習慣を、身につけるよう努力しなければなりません。このことは、日々の生活の成り行きが課するもろの思いなしが与える心の傷痕を孤独によって消すか、あるいは、リベラル・アーツによって癒すような人々だけが手にすることができるのです。(ibid.1-3)

ここで語られているのは、日々の生活における様々な思いなし (opinio) が与える傷を癒すものとしてのリベラル・アーツ (liberales disciplinae)⁵⁾である。「opinio」がギリシア語の「ドクサ (δόξα)」であることや、「感覚 (sensus) から身を引き心それ自体へ (animum in se ipsum)」という記述は、我々にプラトンやプロティノスを想起せしめる。だが、ここではまだ「心の傷痕を癒すもの」という情緒的な語が用いられており、それが魂において果たす役割ははっきりしない。ただ、日常生活で体験する様々な思いから身を引き、自分自身と向き合おうとしたときに、真理にいたる道が開かれるというアウグスティヌスの基本的な志向性が表れている。だが、まだこの段階では、リベラル・アーツと孤独が同列に並べられるにとどまっている。

リベラル・アーツの教養は、適度で慎み深いものであれば、学問を愛する人々をして、真理の把握に対してより生き生きと、より忍耐強く、より整えられたものとなすので、(中略) 彼らは至福の生と呼ばれるものを、心を燃やして求め、一貫して追及し、ついには魅せられてそこに留まるにいたる。(ibid.1-24)

今度は、真理の把握に何らかの役割を果たすものとしてのリベラル・アーツが語られた。リベラル・アーツが真理の把握のための準備段階であることは容易に読み取れるが、果たしてどのような意味で準備段階といえるのだろうか。それは必要不可欠なのだろうか。そのような問には全く答えていない。さらに、ここで「至福の生」(beata vita) という語が現れる。もし真理を把握できたならばその境地に留まりたいと願う、という思いはプラトンの『国家』の「洞窟の比喩」中にも見られる。

こうして音楽においても、幾何学においても、星の運動においても、数の必然性においても、秩序が支配しているから、もし人が秩序のいわば源泉、すなわち、最も内なるものを見ようと欲するならば、これらのものの中に見出すであろうし、あるいはまた、これらのものを通して秩序へと間違いなく導かれるであろう。そのような学識は、(中略) 哲学の兵士、あるいは、指揮官をも養い育てるのである。(ibid.2-14)

ここで初めて音楽、幾何学、天文学、算術というリベラル・アーツのうちの四科 (quadrivium) が具体的に登場する。これら四科はプラトンに由来し、ポエティウスによってそのように名づけられたことはよく知られている⁶⁾。この四科は「秩序が支配している」と指摘される。これらの学識が「哲学の兵士」を養い育てる、と述べている。ということは、ここでついに、哲学のためにリベラル・アーツが必要であることが明言されたのである。

理性は最初に自分のいわば一種の仕掛けや道具を区分し、表示し、分析し、問答法と呼ばれる学問の中の学問を産み出さず、いったいいつ他の作り出されるべきものに移り行くであろうか。問答法は、どのように教えるべきか、どのように学ぶべきかを教える。この学問において、理性は自己を開示し、自分が何であるか、自分が何を欲するか、自分が何をなするかを示すのだ。(Ibid.2-38)

ここにおいて、問答法 (dialectica) が諸学の中で特権的地位を与えられる。この学問は「学問の中の学問」である。なぜなら、「どのように教えるべきか、学ぶべきかを教える」学問、すなわちその他の学問を根拠づける学問だからである。このことも、プラトンが哲学的問答法 (διαλεκτική) を特別な学として位置づけていたことに一致する。なお、dialectica の語は、「弁証法」と訳されることが多いが、元来ギリシア語の διαλεκτική は、「問答法・対話術」くらいの意味で、問答によって真理を探究していくという姿勢を示す語であるとみてよい。それが後年様々な言語に吸収され、独特の意味内容を付与されることになった。本稿では、そういった事情による混乱を避けるため、「問答法」という訳語に統一することにしている。

この後、「神的な事物のいと至福な観想 (ibid.2-39)」に至ろうとし、「直接に見出される美」を欲した理性は、感覚に妨げられる。そして、諸学問すなわちリベラル・アーツの吟味が始まる。「それらすべての学問において、一切は数的なものとして、とくにあの比例においてより明白にはっきりした形となって現れた」(ibid.2-43) とあり、「哲学の学科は数の履修をとり入れている」(ibid.2-47) と、数に関する学としてリベラル・アーツを規定し、哲学の準備段階と考えている。だが、数に関する学問が、なぜ哲学の準備になるといえるのだろうか。アウグスティヌスは、数に関する学他の学に対する優位性を指摘した上で、リベラル・アーツを「数に関する学」としている。だが、なぜそれが優位なのか、リベラル・アーツが数に関する学であるとはどういうことなのか。先に、秩序に関する学と述べていたが、そのこととどのような関係があるのだろうか。

それが模倣されれば他のものが美しくなり、それと比較されれば他のものが醜くなる、あの美を一瞥することが私たちに許されている。(ibid.2-51)

「あの美」とは、美そのものである。秩序を秩序たらしめるものとしての「美そのもの」は、プラトンにおいてすべてのものの原因とされる「善のイデア」と同じかどうかは、ここで問題にすることはできない。ただ、学ばれるべき究極のもの、という点で一致していると考えて差し支えないと思われる。特にプラトンの時代においては、学ばれるべき理想のものは「善美なるもの (καλοκαγαθία)」という語で呼ばれており、「善」と「美」は分かちがたい概念であった⁷⁾。いずれにせよ二人にとって、すべての学問は、この「学ばれるべき究極の一者」に向かうのである。

思うに、この感覚的世界においては時間や場所が何であるかを熱心に考察しなければならない。時間であれ、わたしたちを喜ばすものは、部分においてではあっても、部分が構成する全体がはるかにすぐれたものであることを理解するためである。(中略) 知性界においては、どんな部分であれ、それは全体と同様に美しく完全であることが博学の人 (doctus) に一目瞭然となるためなのである。(ibid.2-51)

『秩序』の始めの部分に、全体を見ることの重要性が説かれていたことを思い起こそう。ここに語られた「博学の人」は、知識が豊富な人というよりは、よく教えられた人、賢人を意味する。プラトンにおいてはイデア知を得た最高の知恵者、哲学者といわれるはずである。部分にばかり目を向けるのではなく、全体に目を向け、その秩序と調和の美を観照すること、これこそが教育の究極目的である。ここにおいて、プラトンとアウグスティヌスは同一の見解を示すのである。

以上より得られた、アウグスティヌスの教育観を次にまとめておこう。すなわち、

1. 感覚から身を引き、精神の世界に目を向けなくてはならない。
2. 宇宙全体の秩序を観照することが、教育の究極目標であり、そのためにはリベラル・アーツが必要である。
3. リベラル・アーツは秩序が支配している。
4. リベラル・アーツも、問答法も、ともに数・比例が支配している。

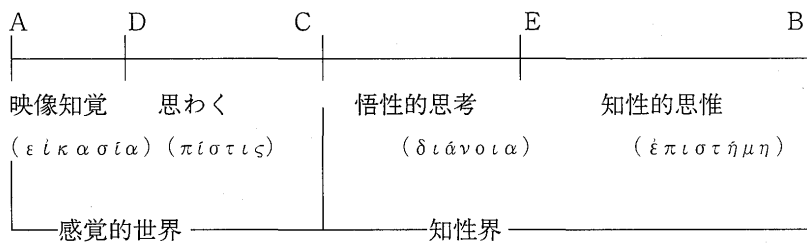
特に、3・4番が検討されなくてはならない。このままでは、リベラル・アーツと問答法が同じ成果をもたらすものということになってしまうからである。

3. 『国家』にみるプラトンのリベラル・アーツ観

『秩序』には、リベラル・アーツが宇宙の秩序を観照し、最高の叡智に達するためにどのような役割を果たすのか、明確な記述がなかった。とくに、リベラル・アーツも問答法も数・比例が支配している、という洞察を得ていながら、前者が後者にとって準備段階といえるのはなぜか、ということに関しては全く答えられていない。その答えはプラトンに見出すことが可能である。アウグスティヌスの教育観の原型はプラトンに見出される、ということは既に識者により指摘されていることである⁸⁾。プラトンの教育観が最も明確に語られたテキストとしては『国家』をあげることができよう。そこでは、哲人王による統治が理想であると語られ、その哲人王を教育するためのプログラムが検討される。プラトンの教育理念が明らかにされるのは、第六巻のいわゆる「線分の比喩」、第七巻の「洞窟の比喩」によってである。以下、それらの比喩を概観することから始めることにする⁹⁾。

(1) 線分の比喩

線分 AB 上に任意に点 C をとる。さらに、AC 上に点 D を、CB 上に点 E を、 $AC : CB = AD : DC = CE : EB$ となるようにとることにする。AC は可視的世界（感覚的世界）を、CB は知性界を表す。AD は、映像・似姿を、DC はその実物を、CE は算術や幾何などの学問を、EB は問答法によって把握される知を表す。それぞれに対応する魂の状態は、AD が映像知覚・間接知覚（*εἰκασία*）、DC が思わく・直接的知覚（*πίστις*）、CE が悟性的思考・間接知（*διάνοια*）、EB が知性的思惟・直接知（*ἐπιστήμη*）、いわゆるイデア知となる。



比例関係から読み取れることは、

1. 可視的世界と知性界は、いわば影・映像とその本体のような関係にある。
2. 悟性的思考と知性的思惟も同様、影と本体のような関係である¹⁰⁾。

(2) 洞窟の比喩

I 無教育な人間は、いわば深い洞窟の奥に手足も首も縛められて洞窟内で繰り広げられる影絵芝居を見ている囚人のようなものである。彼らの後ろからは火の光が照らしている。この火と、縛められた者たちとの間には高く作られた胸壁がある。その胸壁の上を、様々な道具や人形、石や木でできた動物の像が高く差し上げられながら運ばれていく。時には声を出しながら、時には沈黙したまま。そのように縛められた者たちは、背後にある影の本体は見ることができず、影絵を見てそれが真実であると思い込んでいる。そんな中で、影像についてお互いに話し合っている。影像が現れる法則を最も深く洞察し、次に現れる影像を最も正確に予言できる者には、特別の栄誉が与えられることになっている。

II その中の一人を解き放ち、立ち上がって首を廻らすように、影絵の本体やその背後で影絵を映していた火を見るように強制されたとしよう。彼はそれが影の本体であるとすぐに理解することはできないだろう。

III さらに、彼を力づくで洞窟から引きずり出し、太陽の光のもとまでやってくると、あまりにも明るすぎて何一つ見ることはできないはずである。そこで、最初に影を見れば楽に見えるだろう。次に水に映った映像を見る。

IV そのようにして目が明るさに十分慣れたところで、それら映像の本体を見ることにする。その後で、天空に目を移し、星や月を見た後、最後に太陽を見るにいたる。太陽を見たら、それが四季をもたらし、可視的世界のすべてを支配し、洞窟内のものに対してもある仕方その原因となっている、と推論できる。この状態は、い

わば「幸福者の島」にいるような、至福の状態である。だが、そこに留まりつづけることは許されない。彼は洞窟内に戻り、かつての仲間を導かなければならない。

(3) 「洞窟の比喩」の解釈および両比喩の対応

I・IIの洞窟内の世界は可視的世界であり、様々な思わくによって動いてしまう我々の日常生活を表している¹¹⁾。III・IVの洞窟外が知性界すなわちアイデア界を表す。さらに、Iは線分における映像知覚、IIは思わく、IIIは悟性的思考、IVは知性的思惟と対応づけることが可能である。したがって、洞窟外に上昇して、上方のものを見ることは、魂が「思惟によって知られる世界」へと上昇していくことである。洞窟の比喩は、その冒頭に「教育と無教育ということに関して」と明言されていることから、この比喩は全体として無知なものに知を獲得させるプログラムであるということが出来る。そのプログラムの最終目的は、直前の「線分の比喩」に示されていた知性的思惟の世界への上昇であると考えられる。

実はこの二つの比喩の対応関係については様々な議論が展開されているのだが¹²⁾、プラトン自身がその対応関係を示している箇所があるので、そのことをもって両比喩には対応関係がみられるという立場に立つことにする。その箇所を一部引用してみよう。

「縛めから解き放たれ、影からその実物の映像や（影をうつしていた）火の光の方に向きを変え、洞窟から太陽のもとへと上昇していくこと、そしてそこまで昇ってから、動物や植物や太陽の光を直視することはまだできずに、水に映った神的なものや実在の映像とに（つまり影は影でも、太陽に比べればそれ自身が模倣的な光によってうつし出された模倣の影ではなく、ちゃんとした実物の影に）視線を向けること、こういった段階があった。われわれがこれまで述べてきたいくつかの学術を研究することは、全体として、ちょうどこれに相当するような力をもっているのであって、それは、魂の内なる最もすぐれた部分を導いて、実在の内なる最もすぐれたものを観ることへと、上昇させていく働きをするものなのだ。ちょうど肉体のうちで最も明るい部分（目）を、形を具えたものや可視的なものの世界のうちで最も輝いているもの（太陽）へと導くように。」（『国家』532b-d）

これまで述べてきたいくつかの学術とは、算術・幾何学・天文学・音楽をさしている。これらはリベラル・アーツのうちの四科であり、これをもってこの四科を重んずることの起源はプラトンにある、といわれるのである。

プラトンは、リベラル・アーツ（このように呼ぶことが許されるなら）を「慣らし」のための学問と考えている。プラトンにとって教育とは、まず、可視的世界・思わくの世界、換言すればさまざまな欲望に支配された日常世界から、知性界に魂を向けかえること（μεταστροφή）である。その後いきなり哲学的問答法に入るのは不可能なので、慣らしのため学問が必要である。それがリベラル・アーツであるとされているのである。

では、なぜリベラル・アーツが「慣らし」たりうるのか。それは、次の記述に現れている。

「ある程度、実在に触れるところがあると言われた幾何学、およびそれに続く諸学術であるが、これらの学問はさまざまな仮設を絶対に動かせないものとみなし、それらにロゴスを与える（さらに説明して根拠付ける）ことができない限りににおいて、実在について夢見ているけれども、醒めた目で実在を見ることは不可能なのだ。（中略）哲学的問答法の探求の行程だけが、そうした仮設をつぎつぎと破棄しながら、始原（第一原理）そのものに至り、それによって自分を完全に確実なものとする。そして、異邦の泥土の中に埋もれている魂の目を、おだやかに引き起こして、上へと導いていくのだ…われわれが述べたもろもろの学術を、この転向（向け変え）の仕事における補助者としてまた協力者として用いながら。」（ibid.533b-d）

ここから、幾何学などの諸学問が真実在を探求する哲学的問答法の「慣らし」の地位を獲得できた理由は、その感覚を超えた論理的体系性にあるといえよう。理論を展開するのに根拠となるのは、決して多数の人々の同意などではなく、あくまでも公理から導かれる論理性という秩序である。多数の人々の同意、共通の思い込みを基礎とせず、それ自身の持つ論理性が自らの正当性を示すことのできる学問こそが哲学的問答法の「慣らし」として定められたのである。

さらに、天文学についても、「天空を飾る模様は、目に見えない実在を目指して学ぶための模型として用いなければならない。（中略）ちょうど幾何学を研究する場合と同じように、『問題』を用いることによって天文学を探求し、天空に見えるものに拘泥するのは止めることになるだろう。（Ibid.529e-530c）」とある。天体観測から得

られた結果から問題を発見し、仮設をたてて問答を進め天空の秩序にいたる、という道程は、幾何学の場合のように、哲学的問答法の準備となるのである。

音楽についても、「目と天文学の関係は耳と音階の調和に関わる知識（音楽）に等しい (ibid.530d)」とある。音楽は音階の調和の中に数的な比例関係の秩序を読み取る学問・学芸であり、感覚的所与から実在ないし宇宙の秩序を探求する契機として、やはり問答法の準備とされるのである。

それら諸学問と哲学的問答法は、「線分の比喩」の言葉遣いに従うと「影と本体」の関係にあるのだった。では、諸学術が哲学的問答法に対して「影」といわれるのはなぜか。それは、論理体系の基盤である「仮設 ὑπόθεσις」の果たす役割の違いによるといえる。例えばプラトンが重視していた幾何学は、公理から出発し、論理の力によって理論体系を構築してゆく学問である。ただ、出発点である公理は疑いを持つことが許されない前提となるものである。それは、説明して根拠づけることができないもの、つまり本当に知っているとはいえないものである。そのようなものを出発点にして組み立てられた体系は、真の知識とはみなしていない。プラトンにとって、公理のように疑念をさしはさむことが許されない、したがって証明することができない、絶対的な約束事は、光が届かない闇なのである。諸学術はそういう仮設を始原として出発している限り、どんなに緻密で明晰判明な理論を構築しても究極の実在にいたり着くことはできず、闇の支配を免れることはできない。この意味において、諸学術すなわちリベラル・アーツは、哲学的問答法に比べて暗い影のおちた学なのである。

さて、哲学的問答法がどんな学問であるかは、もはや明らかであろう。

幾何学のような堅固な理論体系をもつ学問を「影」としているのであるから、当然体系性を持っていると考えられる。『国家』第一巻において、「正義とはなんであるか」という問をたて、正義の定義づけを行おうと試みている。問答法はこのように、対話によって正義や節制、勇気などの様々な徳の本質を説明するロゴスを獲得しようとする試みであることは、一般に知られている。この問答法も、仮設から出発する。そして言論（ロゴス）の力のみによって、最後に万有の始原（ἡ τοῦ παντὸς ἀρχή）に到達する。これが「善のイデア」であることは、大体の一致をみている。問答法における仮設は、文字通り「下に（ὑπό）置かれた（θεσις）」ものとして機能するだけである。それは、踏み台、飛躍のためのよりどころである、といわれている。それは具体的にはどのようなものか、意外に十分には検討されていない。例えば「正義とは何か」という問題について問答するとしよう。そのとき、「正義」という言葉が一般に使用されているという事実は認めざるをえないことである。この言語使用の事実のことを仮設といっているとは考えられないだろうか。「正義」という語が存在し、広く使用され、概ねではあれ「家族的類似性」としての意味の一致をみているという事実、これは推論の根拠とはなしえないが、出発点には据えなくてはならない。

問答によって得られたイデア知は、ある個別事象を知の連鎖の中に組み入れて、原因や理由を説明したり、それから生じる様々な帰結を推論したりすることのできる知である。イデア界とは永久に変わることのない秩序連関であり、イデア論は全体的世界解釈の基礎なのである。

4. 『秩序』と『国家』が目指す教育

次に、『秩序』に示されたアウグスティヌスの教育観をプラトンのそれと対応させていこう。

(1) 感覚的世界と知性的世界

『再考録』第一巻第三章において、プラトンの知性的思惟の世界への言及がみられるように、感覚的世界（可視的世界）と知性的世界という二世界説は、アウグスティヌス哲学の土台となっていることに異論はないものと思われる。アウグスティヌスの「感覚から身を引き、精神の世界に目を向けなければならない」というのは、プラトンにおける「魂の向け変え」、つまり、可視的世界から知性界への転向、「洞窟の比喩」における「洞窟の外の世界への上昇」に対応している。教育の基本は、魂の向け変えということである。

(2) 宇宙全体の秩序を見ること

『秩序』には、全体を見ることの重要性が繰り返し説かれていた。冒頭付近ではモザイクの例によって、「部分

だけでなく全体を見なくてはならない」ということが述べられていた。そして終わりに、「私たちに気に入らない部分でも、その全体が驚くべき仕方で調和している全体」、「どんな部分であれ、全体と同様に美しくあること」が学の奥義をきわめた人にとっては明らかである、とある。全体を見ること、これはプラトンの「洞窟の比喩」において、洞窟外へ出た囚人が太陽（すなわち善のアイデア）見た後、それが四季をもたらし、地上世界のすべてを支配し、洞窟内の世界にもある仕方でその原因となっている、と理解する段階に相当する。つまり、哲学的問答法によって、「仮説を次々に破棄しながら、始原にいたり、それによって自分を完全に確実なものとする」段階である。

(3) 秩序が支配するリベラル・アーツ

プラトンにおけるリベラル・アーツは、洞窟の外に出た囚人が、実物を見る前に、明るさに目を慣らす段階、すなわち哲学的問答法に入る前に、悟性的思考を鍛える段階なのであった。なぜそれが、最高の英知を身につけるための準備となりうるのか。それは知性的思惟の世界を本体とすればその影のような存在だからである。知性的思惟の世界は、仮説から出発して始原へと向かう、高度に緻密な体系的知の世界である。その世界秩序に入っていくために、同じく体系性を有し、ものごとの秩序にかかわる学問すなわちリベラル・アーツが、階梯としての機能を果たすのである。アウグスティヌスは「秩序を有するリベラル・アーツは、哲学の兵士を養い育てる」と述べていたが、「養い育てる」とは悟性的思考の練磨により真の知識への到達を容易ならしめることである。ただ、数・比例が支配する学問であるということでリベラル・アーツと哲学的問答法との間の区別ができなくなると指摘した。だがこのように見てくると、アウグスティヌスはそのどちらにも秩序が、いわば達成段階をことにしつつ支配している、ということ別の言葉で語ったとも考えられる。プラトンの「始原＝善のアイデア」がアウグスティヌスの「神」であるかどうかはここでは問題にできない。それでも、学ぶべき究極のものを頂点とした体系的な世界とその秩序への導き手として、リベラル・アーツは存在意義をもつのである。

5. 現代のリベラル・アーツ—一般教養科目

真理を把握するためには、その準備段階として算術や幾何学などのリベラル・アーツが必要である、という二人の見解は、現代の私達には奇異な感がある。このリベラル・アーツに端を発する一般教養科目を、私達は真理把握、宇宙秩序の観照への導き手、などと思っではない。むしろ、幅広い視野を持った人間の育成、いわば人格陶冶を目的とするという見の方が普通なのではないだろうか。無論、一般教養科目に含まれる学問は、リベラル・アーツよりはずっと多彩であり、体系性・秩序を有する学問とはいえない科目も存在する。そのことを考えに入れても、やはり一般教養科目を究極の知にいたる階梯とみなすことはほとんどないと言ってよいだろう。そのうえ、昨今の高度に専門化・細分化された学問事情では、幾何学や算術（代数）などの学問をプラトンやアウグスティヌスのように「踏み台」として扱うことは不可能に近い。物理を専門にするには数学が必要だ、などということはあっても、それはプラトン・アウグスティヌスのいう踏み台の意味とは異なっている。彼らは、この世のすべて、宇宙すべてを把握する壮大な知的体系を構想しているからである。

プラトン・アウグスティヌスの意味におけるリベラル・アーツがどのような経緯で現代のように変化したのかを跡づけることは今後の課題とする。ただ、人格形成と真理の探究は、次のように考えれば決して無縁ではない。リベラル・アーツを踏み台に用いるために、プラトン・アウグスティヌスが共通して条件にしていたことを思い出そう。それは、「感覚的世界（可視的世界）から知性的世界への転向」である。感覚的世界は、視覚によって捉えられる世界というばかりではなく、思わくの世界、欲望の世界でもあった。名誉を追い求め、欲望を満足させることに汲々とする日常世界のことであった。そこから脱するためには大きな苦痛を伴うことは、「囚人を洞窟の住まいから、粗く急な登り道を力づくで引っ張って行って、太陽の光の中へと引き出すまでは放さないとしたら、彼は苦しがり引張っていかれるのをいやがり」（『国家』515e）と表現されている通りである。その苦痛に耐えたものだけが、知性的世界に目を向けかえることができるのである。だが実際問題として、彼らが言うように、日常世界を脱却し、まなざしを完全に知性的世界に向けているものだけが学問をするに値する、などということは現実離れの感を免れない。彼ら自身、そのようなことが厳密に実践できていたとも考えにくい。

ところで、先に現代の一般教養は幅広い視野を持った人間の育成・人格陶冶を目的とする、と述べたが、それは具体的にはどういうことだろうか。広い視野に立つとは、様々な感情や根柢の薄弱な思い込みなどといった、日常の様々な憶見から脱却し、全体を見据えながら事柄の本質を見極めようとする態度ということができよう。やはり、「感覚的世界から知性的世界への転向」は行われていると考えてよい。全人的な人格陶冶というときにも、人格を形成する事柄として、どのようなことに興味を抱くか、ひいてはどのような知識を持ちそれを秩序づけるかということが大きな比重をしめると考えられてはいないだろうか。現代でいう教養とリベラル・アーツは逆の志向性を持つように見えたが、このように考えれば現代の一般教養科目も、リベラル・アーツが理想としたことと決して矛盾はしていない。ただ本稿では、アウグスティヌスが取り上げているリベラル・アーツのうちの trivium (三科。文法学・修辞学・論理学) を扱うことができなかった。このことも今後の課題としたい。

この後、リベラル・アーツが導き手となっていた哲学は、数々の独創的な思索、体系構築を生んだことは言うまでもない。だが哲学的思索は、狭義の学問としての哲学においてのみ行われるわけではない。リベラルアーツはこの後、あまたの個別科学や学芸・芸術を生み出したが、それらにおいても、哲学的思索は脈々と生き続けることになるのである¹³⁾。

注

- 1) 使用テキストは、Éuvre de Saint Augustin,t.4/2.Dialogues philosophics : *De Ordine-l'Ordre*. Bibliothèque Augustinienne : Paris : Institut d'Étude Augustiniennes,1997 (以下 B. A. と略記)
訳文作成にあたっては、上記の仏語対訳及び『秩序』(アウグスティヌス著作集1 初期哲学 (1)、教文館)を参照した。
- 2) 例えば、IV -1-1, IV -16-30, X -9-16 など。
- 3) 廣川洋一「自由三学科の成立」新岩波講座哲学 14『哲学の原型と発展』、1985、岩波書店、p.328
- 4) B.A.Introduction,p.28,31
- 5) Liberales disciplinae とあり、artes liberales ではない。『告白』においても、IV -1-1 及び X -9-16 では doctrinae liberales が、IV -16-30 では artes liberales が用いられている。またキケロにおいても、artes liberales が統一的に用いられているわけではない。『弁論家について』だけをとってみても、「artes, quae sunt libero digna (1.72)」、「artes ingenuae (1.73)」、「doctrinae (3.127)」などと多彩である (Oxford Classical Text)。なお、リベラル・アーツはギリシアの「ἐγκύκλιος παιδεία」(普通の、日常の教育)に由来し、ローマ世界で artes liberales となった。H.I.Marrou, *Histoire de l'éducation dans l'Antiquité* Édition de Seuil,Paris,1948, (2 巻 p.84) によれば、「artes」は文学に、「disciplinae」は数学に用いられる語であったとのことである。以上より、この語 (liberales disciplinae) は artes liberales と同義である、と考える。
- 6) E.R.クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一・岸本通夫・中村善也共訳、みすず書房、1971,p.50。なお、H.I.Marrou の前掲書 1 巻 p.121 によれば、quadrivium はピタゴラス派の伝統に基づいている、という。なお、本稿で扱うリベラル・アーツは quadrivium に限ることとする。
- 7) H.I.Marrou の前掲書 1 巻 p.79 ~ 81
- 8) 例えば、上村直樹「自己知と「生」において」の学知・アウグスティヌス『秩序について』研究叙論 -J『中世哲学研究 Veritas』,21号,2002,p.27
- 9) 使用テキストは、Oxford Classical Text, Platonis Opera IV。訳文作成にあたっては、藤沢令夫訳を参考にした。
- 10) 線分の比喩のこの解釈は、伝統的解釈とは異なっている。伝統的には、線分の4つの部分は、順に明晰になっていく知性の段階を表している、とされる。(R.L.Nettleship, *Lectures on the Republic of Plato*, London,Macmillan,1901) だが、本稿の目的にとっては映像知覚とその本体の知覚を区別することに意味がないと判断し、「線分の比喩」の成果をこのようにまとめた。この解釈を提案する学者も存在する。例えば、A.S.Ferguson, "Plato's Simile of Light", Part1 (*The Classical Quarterly*,Vol.15,1921)
- 11) Julia Annas, *An Introduction to Plato's Republic*, Clarendon Press,Oxford,1981,p.253
- 12) 両比喩の対応については様々な見解が存在する。特に、「線分」の DC 部分は「信念、思わく」などと呼ばれる部分なのに、「洞窟」において II の段階で影絵の本体を見せられる囚人は、それが影絵の本体だという信念を抱くに至っていない。ここから、この二つの比喩は対応させられない、と考える学者がいる。その詳細については、R.C.Cross and A.D.Woozley, *Plato's Republic, A philosophical Commentary*, London,Macmillan,1964,p.207 ~ 228 参照。筆者自身の立場は次のようなものである。「線分の比喩」は、可視的世界と知性界、諸学術と問答法の関係を、影とその本体の関係という比喩を用いて表現することを目標としており、「洞窟の比喩」は実際の学習プログラムであるため、厳密に一致しない部分はあっても、概ね重ねて読むことができる。特に、洞窟内で縛められ、影絵を見ている状態は「われわれ自身によく似た」と言われている (515a) のだから、「線分」の AC 部分すなわち可視的世界全体を表している、と考えてよいと思っている。「線分」で、AC 部分を AD と DC に分けたのは、知性界である CE すなわち悟性的思考と EB すなわち知性的思惟、

アイデア知を、影と本体の関係で説明しなかったから、という Ferguson の前掲論文の立場をとる。

13) 詳細は、坂部恵『モデルニテ・バロック～現代精神史序説』、2005、哲学書房、p.226～250

(2006年1月10日受理)